付 属 資 料

付属資料

一九九九年十月三日

台灣地震災害救濟
醫療活動報告書

日本政府緊急醫療支援隊
團長　小井土　雄一

本文：日本政府於九月二十二日派遣至台參於台灣地震救援之日本政府緊急醫療支援隊（日文名：國際緊急援助隊醫療團）

十一名團員由團長小井土雄一帶領，在災區展開爲期十四天之救濟活動，承賜南投縣縣長以下各單位鼎力協助，本人在此深表謝意。

本團於二個禮拜的醫療服務行動期間，治療一〇四名病患，希望對災民有所幫助。因爲貴縣單位之全盤支援，使得本團能夠順利達成救災之任務。尤其在發生災害不久的混亂期間，貴縣安排鹿谷及中寮鄉之醫療地點、住宿以及提供缺乏之醫療品、交通工具、用餐等。本人僅代表團隊由衷表達感謝之意。同時，我們能如此大功告成之背後，翻譯人員及台灣友人的義工、日僑義工們的付出及愛心，確實功不可沒。在此本人需要強調這一點。

【一】活動期間、場所及選定經緯

本團於九月二十二晚上（三）到達台北，當晚進入南投縣救災指揮中心拜會南投縣彭縣長及衛生局陳局長，得知本團可參於震央『集集地區』鄰近之鹿谷鄉，於是二十三日上午立即和該地區秀峰村村長以及秀峰國小校長，協商如何借用教室等問題，最後決定顧及餘震之慮，將在操場搭設醫療帳篷展開至二十五日之醫療行爲。

另一隊則於二十四日起，在中寮鄉公所前搭設醫療至二十六日止，二十七日和在中寮國小開始醫療活動的慈濟功德會討論結果，決定借用部分慈濟設於中寮國小避難所之臨時醫療站，從二十六日中午開始接受災民就診至十月三日（日）中午止。

台灣地震災害救濟醫療活動報告書

受文者：正本：南投縣　彭縣長百顯先生

副本：南投縣衛生局　陳局長楠桐先生

南投縣中寮鄉　吳鄉長朝豐先生

亞東關係協會　林會長金莖先生

日本交流協會

台北事務所　山下所長

提報者：日本政府緊急醫療支援隊　團長　小井土　雄一

翻譯者：日本政府緊急醫療支援隊　翻譯員　王　珠惠

歷之病患，本團將簽寫轉診診斷書（日文：醫師紹介狀），請後續醫療人員協助。

【五】今後因應措施之建議

甲 隨著生活環境之惡化，內科病患有增加之趨勢，帳篷生活越久，老年人、兒童等弱勢災民之負擔越爲嚴重，因此簡易屋之架蓋，災民之遷入，刻不容緩。

乙 可想像大地震、餘震導致災民內心所受創傷甚深，此類『外傷後壓力症候群』(PTSD)，應採取早期發現，避免症狀出現後，才給予治療。

丙 至於疫病（傳染病）方面，目前本人認爲用水及衛生用品已獲得改善，生活用水受污染之慮已可減輕，霍亂、瘧疾等介由水感染之傳染病發生之可能性亦不大。不過，撤離避難所之災民，在草地上方便者過多，可能需要進一步加強衛生教育。

丁 登革熱也是不可忽略之疾病，，此區曾爲登革熱地區，再加上帳篷生活、蚊蟲咬傷者有增無減，應採取發放蚊帳、防虫液等措施。

戊 由於災區治療體系之瓦解，慢性疾病之持續治療乃是緊急處理問題之一。應盡快建構照獲慢性病患或孕婦之管道。

【六】國際緊急援助隊（醫療隊團員名單）

派遣期間：一九九九年九月二十二日至十月五日

團長（醫師）：小井土 雄一　　日本醫科大學附屬醫院高度救命急救中心

【二】活動內容、疾病之傾向

自九月二十三日至十月三止所進行之醫療活動，仍爲南投縣衛生局所允許之醫療行爲，地點：鹿谷、中寮鄉公所、中寮國小等三所臨時救護站。

診療病患約一、〇四一人。

就診病患之疾病，一半爲外傷、另一半爲內科疾病，外傷屬擦傷、撞傷之處理案子眾多。傷口感染有增加之慮，尤其二十七日中寮下雨後，訴其病情者，有增無減。另一類爲慢性疾病惡化而求診者，或因地震而無法繼續服藥之求診者。在此特須關注的是精神科方面之疾病，如失眠、緊張過度、因精神上之壓力引發之頭痛、頭暈病患之增加（請參考附表數字）。本團於災害後四十八小時抵達現場，但並沒發現有需要緊急醫療救援之病患，亦沒發現有需要緊急轉送大醫院之病患。因此可見，基本上需要接受高次醫療之病患者，皆已移送至各醫療相關單位接受治療。

觀察顯示，疾病結構已由外科性疾患轉爲內科性疾患，而即將引發精神科疾病，尚待解決。

【三】治療結果之統計

請參考在台期間治療結果統計表

【四】活動結束後之接班情況

當前在中寮鄉慈濟綜合醫院擔起責任醫院，醫療活動起碼繼續一個月，因此本團照顧之病患皆請慈濟醫療隊繼續服務，至於本團已向縣衛生局長、中寮鄉鄉長、慈濟功德會台北分會、中寮國小站通報十月三日中午撤收醫療站。須要繼續治療需要之前病

翻譯（義工）：

王珠惠　周慧珍　永井江理子　藤井彰二　深山厚子

劉長輝　石佳祥　宮崎聖子　安西真理子　林雅偉

細木二美　有川賢志　登川政洋　布施優子　增田政廣

山本篤志　林惠美　劉華容　呂怡婷　高詹燦

柯欣瑋　管秋燕　廖李昕怡　黃純芳　趙榮泰

黃淑燕　劉宜芳　葉懿萱　蔡青雯　黃心寧

陳政巨　李建成　蔡文敏　王修華　葉美鈴

彭春陽　黃天寧

司　機：

馬燕標　沈青江　揚進樂　陳順德　蕭福墘

副團長：藤谷　浩至　國際協力事業團人事部人事課

醫　師：近藤　久禎　日本醫科大學附屬醫院高度救命急救中心

護　士：多田　章美　豐中渡邊醫院

護　士：毛塚　良江　濟生會宇都宮醫院

護　士：宮崎　朋子　國際緊急援助隊登記護士

護　士：鳥田　英子　學校法人北里學園北里大學醫院

醫院調整員：山岸　勉　國際緊急援助隊登錄調整員

醫院調整員：中田　敬司　國際緊急援助隊登錄調整員

業務調整員：三浦　喜美男　國際協力事業團筑波國際中心業務第二課

業務調整員：伏見　勝利　國際協力事業團沖繩國際中心業務課

醫師（義工）：原田　信哉

【七】活動日期行程表

日期	活動內容	備註
二十二日	下午：結團典禮（於羽田機場） 田羽機場→中正機場（華航） 通關後、移動至南投縣救災指揮中心拜會縣長、衛生局長。 行李、醫療器材搬移中興新村地方行政研究中心。	由亞東關係協會文教組陳振宗組長、日本交流協會山田洋一、佐藤秀二負責迎接。
二十三日	上午：於鹿谷秀峰國小搭設帳蓬、中寮鄉公所前同時搭設醫療站、於中寮鄉進行醫療調查、確認工作。	
二十四日~二十五日	全天：鹿谷鄉秀峰村、中寮鄉公所前醫療站治療活動。 二十五日結束鹿谷鄉秀峰村之活動。	
二十六日	上午：於中寮鄉公所前展開醫療活動。 下午：醫療活動地點移至中寮國小操場避難所、繼續進行醫療活動。	二十六日早晨發生大型餘震，因此將住宿移至台中。與慈濟協調後變更醫療地點。
二十七日~十月二日	全天：於中寮國小操場避難所進行醫療活動。	
十月三日	上午：於中寮國小操場避難所進行醫療活動。 下午：撤離帳蓬、器材，於南投縣救災指揮中心拜會縣長、衛生局局長，並提出報告書、簡單的贈送儀式。	
十月四日	上午 :台中市=>台北市。 下午 :拜會(及提出報告書)亞東關係協會、日台交流協會。	
十月五日	下午:台北起飛=>東京羽田機場 CI-100 班機 解團典禮(羽田)	

【八】捐贈器材

附表（2）「捐贈器材名單」,上之器材,醫療品,將贈于南投縣救災對策指揮中心。

附表:（1）診療結果之統計表

（2）捐贈器材之名單

患者人次

	23日	24日	25日	
初診	41	38	43	122
複診		14	9	23
計	41	52	52	145

年齢

	23日	24日	25日	計	(%)
～4	1	5	1	7	5%
5～14	2	6	3	11	8%
15～19	0	1	2	3	2%
20～	1	7	5	13	9%
40～	16	17	19	52	36%
65～	21	16	22	59	41%
計	41	52	52	145	100%

性別

	23日	24日	25日	計	(%)
男性	15	20	24	59	44%
女性	26	21	28	75	56%
計	41	41	52	134	100%

住處

	23日	24日	25日	計	(%)
自宅	12	12	6	30	29%
友人宅等	1	1	1	3	3%
避難所、野外	15	35	42	92	88%
計	16	36	52	104	100%

治療

処方	23日	24日	25日	計
抗生素薬剤	36	50	47	133
処置	0	1	0	1
計	3	8	11	22

主要症状

	23日	24日	25日	計	(%)
疼痛	26	18	37	81	36%
発熱	1	1	1	3	1%
腹痛	2	7	3	12	5%
脱水	0	0	0	0	0%
営養不良	0	0	0	0	0%
咳嗽	5	14	9	28	12%
呼吸困難	0	1	2	3	1%
脳神経科疾病	1	0	0	1	0%
婦産科疾病	0	0	0	0	0%
眼科疾病	2	1	1	4	2%
耳鼻科疾病	0	0	0	0	0%
皮膚科疾病	4	6	8	18	8%
精神科疾病	4	5	7	16	7%
外傷外科疾病	13	14	27	54	24%
其他	1	3	4	8	4%
計	59	70	99	228	100%

診断

	23日	24日	25日	計	(%)
呼吸道感染	3	15	8	26	16%
消化系統感染	2	8	2	12	7%
皮膚疾患	4	7	8	19	12%
外傷	14	13	27	54	33%
慢性疾病	13	6	7	26	16%
精神疾病	4	7	7	18	11%
其他	1	4	3	8	5%
計	41	60	62	163	100%

患者人次

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計
初診	34	39	89	63	74	76	88	68	58	35	624
複診		6	18	16	27	36	39	56	43	31	272
計	34	45	107	79	101	112	127	124	101	66	896

年齢

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計	(%)
～4	0	2	5	3	1	2	3	3	0	6	25	3%
5～14	1	0	6	14	7	8	6	12	9	12	75	8%
15～19	1	1	3	7	7	8	3	10	2	3	45	5%
20～	5	9	20	15	18	24	22	20	14	9	156	17%
40～	18	16	44	21	38	34	54	39	46	17	327	36%
6　～	9	17	29	19	31	36	38	40	30	21	270	30%
計	34	45	107	79	102	112	126	124	101	68	898	100%

性別

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計	(%)
男性	19	29	49	42	51	76	67	64	54	32	483	55%
女性	15	17	50	37	47	36	59	57	47	36	401	45%
計	34	46	99	79	98	112	126	121	101	68	884	100%

住處

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計	(%)
自宅	12	8	15	15	12	19	17	15	13	10	136	17%
友人宅等	2	4	2	1	2	10	5	9	0	1	36	5%
避　ル、野外	1	29	78	59	82	40	104	90	85	55	623	78%
計	15	41	95	75	96	69	126	114	98	66	795	100%

治療

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計
処方	26	43	80	63	83	70	99	100	81	56	701
抗生素薬剤	0	3	1	3	3	2	2	2	2	5	23
処置	12	13	32	19	34	16	40	36	29	19	250
計	38	59	113	85	120	88	141	138	112	80	974

主要症状

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計	(%)
疼痛	20	25	58	39	41	32	73	61	57	49	455	34%
発熱	0	0	0	5	2	3	1	5	2	2	20	1%
腹瀉	0	2	3	3	3	2	2	9	6	0	30	2%
脱水	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	3	0%
営養不良	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0%
咳嗽	3	8	28	24	21	20	22	40	30	28	224	17%
呼吸困難	1	0	3	1	1	2	1	5	5	0	19	1%
脳神経科疾病	1	2	0	1	3	2	4	2	3	1	19	1%
婦産科疾病	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0%
眼科疾病	0	3	2	4	3	0	1	6	5	3	27	2%
耳鼻科疾病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0%
皮膚科疾病	2	5	9	10	9	14	16	19	9	4	97	7%
精神科疾病	4	5	15	4	5	6	13	4	9	4	69	5%
外傷外科疾病	17	17	42	34	44	19	41	38	33	18	303	23%
其他	2	2	7	3	9	3	10	11	10	9	66	5%
計	51	69	168	128	141	104	185	201	169	119	1335	100%

診断

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計	(%)
呼吸道感染	4	9	27	25	26	28	27	45	34	29	254	24%
消化系統感染	0	0	5	4	3	3	2	7	5	0	29	3%
皮膚疾患	2	3	5	10	10	12	21	19	9	5	96	9%
外傷	18	18	49	29	47	20	43	21	34	18	297	28%
慢性疾病	5	12	17	11	20	13	29	21	19	16	163	15%
精神疾病	5	5	12	4	4	5	10	5	7	4	61	6%
其他	4	4	9	17	16	22	37	38	19	11	177	16%
計	38	51	124	100	126	103	169	156	127	83	1077	100%

附表2

南投県衛生局への供与機材リスト

(対南投県衛生局供應品名單)

1．大型テント及び附属品一式（大型帳篷及配件一套）	
・本体、支柱、ペグ（主体、支柱、篷釘）	1件
・蛍光灯（螢光灯）	1件
・テント用ファン（帳篷用風扇）	1件
・キャリア（搬運器）	1件
2．一般用テント（5人用）（一般用帳篷（5人用））	1件
3．折り畳みベッド（折疊床）	10件
4．折り畳みテーブル（折疊桌）	4件
5．折り畳み椅子（折疊椅）	6件
6．発電機（発電機）	2件
7．コードリール（電線卷）	3件
8．浄水器（浄水器）	2件
9．雨合羽（雨衣）	20件
10．ろ水器（濾過器）	4件
11．強力ライト（防水）（強力燈（防水））	2件
12．強力ライト（蛍光灯）（強力燈（（螢光灯））	2件
13．コッヘル（煮鍋）	1件
14．アルミカップ（金属杯）	12件
15．食器セット（食器套件）	4件

台湾地震災害救済医療活動報告書

提出：１９９９年１０月３日

国際緊急援助隊（医療チーム）
団長：小井土　雄一

南投県知事
　彭　百顕　殿

我々、国際緊急援助隊医療チーム１１名は、９月２２日に日本国政府より台湾に派遣されて以来、今日までの間、南投県において、台湾地震災害救済のための医療活動に従事してきました。我々の南投県での医療活動期間中、貴殿及び貴県の多くの人々より多大なるご支援を賜わりましたことを心よりお礼申し上げます。

我々は、２週間におよぶ医療活動期間中に延べ1,041名の患者さんを診察し、微力ながら今回の地震による被災者の方々に貢献できたものと感じておりますが、この我々の活動が無事終了できましたのも、ひとえに貴殿らのご支援があったからでございます。特に、災害直後の混乱の中、我々に鹿谷及び中寮郷での活動場所の斡旋、および宿舎の手配、不足分の医薬品提供、移動時の車輌の手配、食事の提供等のご支援を頂きありがとうございました。また、成功裡に我々の活動を終えることが出来た背景には、ボランティア通訳を始め多くの台湾人ボランティア・台湾在住日本人ボランティアの方々の協力があったことを、併せてご報告申し上げます。

１）活動期間・活動場所とその選定経緯

当チームは、９月２２日（水）夕刻台湾（台北）入りし、その日の内に、南投県へと移動した。２３日未明に南投県救災指揮中心にて南投県知事彭百顕氏および衛生局長陳楠桐氏を表敬した際、当チームの活動場所として、震源地である集集地区に隣接した鹿谷郷を推薦して頂いた。翌日、同地区の秀峰村村長及び秀峰小学校校長らと校舎の使用について打ち合わせた結果、余震による二次災害のおそれから校庭にテントを設営し２５日まで診療活動を行った。

一方で２４日からは、倒壊家屋が大変多く、多数の外傷患者の予想された中寮郷において中寮郷公所前にテントを設営し、２６日まで診療活動をおこなった。その後、中寮郷で診療活動を行っていた民間組織である慈済功徳会医療チームとの相談の結果、彼等の中の一部メンバーの行動予定が９月２６日午前中までであったことからその拠点である中寮国民小学校避難所中庭のテントを借りることとし、そこで９月２６日午後から１０月３日午前中まで診療活動を行った。

2）活動内容・疾病の傾向

9月23日より10月3日まで、11日間の医療活動を行った。医療活動は、南投県衛生局の了承のもと、鹿谷郷秀峰国民小学校校庭、中寮郷公所前、中寮国民小学校避難所の3カ所で行った。診療患者総数は1,041人であった。

診療患者の疾病構造は、約半分が外傷、半分が内科的な疾患であった。外傷は擦過傷の処置、打撲の処置が大半を占めた。しかし、創の感染が見られるものが多くなってきていた。内科的疾患は、一つは生活環境の悪化に伴い発生してきている疾患、例えば感冒、下痢などである。特に、中寮で27日に雨が降ってからは、感冒様症状を訴えるものが多くなった。次は、もともとの慢性疾患が悪化したため来診するもの、あるいは処方を受けていたが、薬が切れたので来診するものである。そして、忘れてはならないのが、精神科的な疾患である。不眠を訴えるもの、緊張状態が取れないもの、精神的ストレスから頭痛、めまいなどを訴えるものが多くなってきている。（詳細は別添資料参照）

発災後、約48時間後に現地入りしたが、救急医療を要する患者、緊急に高次の医療機関へ転送を要する患者には、遭遇しなかった。基本的には、高次医療を要するような患者は、すべてしかるべき病院に搬入されたと考えられた。

経時的な変化を見ると、疾病構造は既に外科的疾患から内科的疾患へ移行している。そして、精神科的疾患が問題になりつつある。

3）診察結果統計

南投県滞在中の診療結果を別添（1）に取りまとめたのでご参照願いたい。

4）活動終了後の引き継ぎ状況

中寮郷内での医療活動は、当面（すくなくとも10月下旬まで）慈済功徳会医療チームが行うことが決定されており、当チームが診ていた患者も、慈済功徳会が引き続きケアすることとなる。当チームの撤退については、既に県衛生局長、中寮郷郷長並びに慈済功徳会の代表に連絡・調整済みである。また、引き続き治療が必要とされる患者に対しては、紹介状を作成し、継続的な処置が可能となるようにした。

5）今後の対応に関する提言

1．生活環境の悪化に伴い、内科的な疾患が増えるであろう。テント生活が長引けば、災害弱者である、老人、子供の負担はどんどん大きく

なるであろう。早期に仮設住宅への転入を進めるべきであろう。

2 甚大な地震の被害、引き続く余震により、被災民は精神的なストレスを感じていると考えられる。外傷後ストレス症候群（PTSD）に関しては、症状が確立する以前の早期から、手を付けるべきであると考える。

3．疫病（伝染病）に関しては、今のところ、水、サニタリーが確保されているので、生活用水が汚染される可能性は少ない。コレラ、赤痢などの水系伝染病が勃発する可能性は、現在では少ないと考えられる。しかしながら、避難所を離れると、野糞をしている人たちも多く、衛生意識の啓蒙は引き続き必要と思われる。

4．もう一つ忘れてはならないのはデング熱であろう。もともと、デング熱が散見される地域であり、且つ、テント生活で、蚊に刺される人々が非常に多くなっている。蚊帳、虫よけの策を労すべきであろう。

5．慢性疾患に関しては、現地の診療体制が崩壊していることも問題点の一つである。慢性疾患や妊産婦ケアーに関して出来るだけ早期の立ち上げが期待されている。

6）国際緊急援助隊（医療チーム）隊員リスト

派遣期間：１９９９年9月２２日～１０月５日

団長（医師）	小井土雄一	日本医科大学附属病院高度救命救急センター
副団長	藤谷浩至	国際協力事業団人事部人事課
医師	近藤久禎	日本医科大学附属病院高度救命救急センター
看護婦	多田章美	豊中渡辺病院
看護婦	毛塚良江	済生会宇都宮病院
看護婦	宮崎朋子	国際緊急援助隊登録看護婦
看護婦	鴫田英子	学校法人北里学園北里大学病院
医療調整員	山岸　勉	国際緊急援助隊登録調整員
医療調整員	中田敬司	国際緊急援助隊登録調整員
業務調整員	三浦喜美男	国際協力事業団筑波国際センター業務第２課
業務調整員	伏見勝利	国際協力事業団沖縄国際センター業務課

以下協力者

医師（ボランティア）

原田信哉

通訳（ボランティア）

王珠惠	周慧珍	永井江理子	藤井彰二	深山厚子
劉長輝	石佳祥	宮崎聖子	安西真理子	林雅偉
細木二美	有川賢志	登川政洋	布施優子	増田政廣
山本篤志	林惠美	劉華容	呂怡婷	高詹際
柯欣瑋	管秋燕	廖李昨怡	黄純芳	趙榮泰
黄淑燕	劉宜芳	葉懿宜	蔡青雯	黄心寧
陳政巨	李建成	蔡文敏	王修華	葉美鈴
彭春陽	黄天寧			

運転手

馬燕標	沈青江	揚進樂	陳順德	蕭福墘

7）活動日程要約

月　日	活　動　内　容	備　考
9月22日	午後　結団式（於：羽田空港） 羽田発→台北着（CI101便） 機材通関後南投県へバス／トラックにて移動 団長・副団長らが南投県救災指揮センター対策本部にて、県知事、県衛生局長に表敬・打ち合せ 中興新村地方行政研修センターへ機材・医薬品運搬	亜東関係協会文教組陳振宗組長、日本交流協会山田洋一、佐藤秀二氏空港出迎え
23日	午前　鹿谷秀峰国民小学校にテントを設営し診療活動開始 中寮郷での医療ニーズ調査・確認	
24日～25日	終日　鹿谷郷秀峰村での診察を継続する一方、中寮郷公所前にもテントを設営し診察活動を行う 鹿谷郷秀峰村での活動は25日にて終了	
26日	午前　中寮郷公所前にて診療活動 午後　活動場所を中寮国民小学校避難所中庭へ移動し、診療活動開始	慈済功徳会との調整により活動場所を変更した 26日朝大きな余震があり、宿泊先を台中市内へ移した
27日～ 10月2日	終日　中寮国民小学校中庭にて診療活動を行う	
3日	午前　中寮国民小学校にて診療活動 午後　テント・機材撤収、 南投県救災指揮センター対策本部にて県知事、県衛生局長に表敬・報告、贈呈式	
4日	午前　台中市→台北市へ移動 午後　亜東関係協会、日本交流協会への表敬・報告	
5日	午後　台北発　→　羽田着（CI100便） 解団式（羽田）	

8）贈与機材

別添（2）「供与機材リスト」にある機材については、南投県救災対策指揮センターへ供与する。

以上

別添：（1）診療結果統計
　　（2）供与機材リスト

報告書写提出先：南投県衛生局長、中寮郷郷長、
　　亜東関係協会会長、日本交流協会台北事務所長

患者人次

	２３日	２４日	２５日	.
初診	41	38	43	122
複診		14	9	23
計	41	52	52	145

年齢

	２３日	２４日	２５日	計	(%)
～４	1	5	1	7	5%
５～１４	2	6	3	11	8%
１５～１９	0	1	2	3	2%
２０～	1	7	5	13	9%
４０～	16	17	19	52	36%
６５～	21	16	22	59	41%
.	41	52	52	145	100%

性別

	２３日	２４日	２５日	計	(%)
男性	15	20	24	59	44%
女性	26	21	28	75	56%
計	41	41	52	134	100%

住處

	２３日	２４日	２５日	計	(%)
自宅	12	12	6	30	29%
友人宅等	1	1	1	3	3%
避難所、野外	15	35	42	92	88%
計	16	36	52	104	100%

治療

処方	２３日	２４日	２５日	計
抗生素薬剤	36	50	47	133
処置	0	1	0	1
計	3	8	11	22

主要症状

	２３日	２４日	２５日	計	(%)
疼痛	26	18	37	81	36%
発熱	1	1	1	3	1%
腹痛	2	7	3	12	5%
脱水	0	0	0	0	0%
営養不良	0	0	0	0	0%
咳嗽	5	14	9	28	12%
呼吸困難	0	1	2	3	1%
脳神経科疾病	1	0	0	1	0%
婦産科疾病	0	0	0	0	0%
眼科疾病	2	1	1	4	2%
耳鼻科疾病	0	0	0	0	0%
皮膚科疾病	4	6	8	18	8%
精神科疾病	4	5	7	16	7%
外傷外科疾病	13	14	27	54	24%
其他	1	3	4	8	4%
計	59	70	99	228	100%

診断

	２３日	２４日	２５日	計	(%)
呼吸道感染	3	15	8	26	16%
消化系統感染	2	8	2	12	7%
皮膚疾患	4	7	8	19	12%
外傷	14	13	27	54	33%
慢性疾病	13	6	7	26	16%
精神疾病	4	7	7	18	11%
其他	1	4	3	8	5%
計	41	60	62	163	100%

患者人次

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計
初診	34	39	89	63	74	76	88	68	58	35	624
複診		6	18	16	27	36	39	56	43	31	272
計	34	45	107	79	101	112	127	124	101	66	896

年齢

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計	(%)
～４	0	2	5	3	1	2	3	3	0	6	25	3%
５～１４	1	0	6	14	7	8	6	12	9	12	75	8%
１５～１９	1	1	3	7	7	8	3	10	2	3	45	5%
２０～	5	9	20	15	18	24	22	20	14	9	156	17%
４０～	18	16	44	21	38	34	54	39	46	17	327	36%
～	9	17	29	19	31	36	38	40	30	21	270	30%
計	34	45	107	79	102	112	126	124	101	68	898	100%

性別

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計	(%)
男性	19	29	49	42	51	76	67	64	54	32	483	55%
女性	15	17	50	37	47	36	59	57	47	36	401	45%
計	34	46	99	79	98	112	126	121	101	68	884	100%

住處

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計	(%)
自宅	12	8	15	15	12	19	17	15	13	10	136	17%
友人宅等	2	4	2	1	2	10	5	9	0	1	36	5%
[illegible]所、野外	1	29	78	59	82	40	104	90	85	55	623	78%
計	15	41	95	75	96	69	126	114	98	66	795	100%

治療

	２４日	２５日	２６日	２７日	２８日	２９日	３０日	１日	２日	３日	計
処方	26	43	80	63	83	70	99	100	81	56	701
抗生素薬剤	0	3	1	3	3	2	2	2	2	5	23
処置	12	13	32	19	34	16	40	36	29	19	250
計	38	59	113	85	120	88	141	138	112	80	974

主要症状

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計	(%)
疼痛	20	25	58	39	41	32	73	61	57	49	455	34%
発熱	0	0	0	5	2	3	1	5	2	2	20	1%
腹瀉	0	2	3	3	3	2	2	9	6	0	30	2%
脱水	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	3	0%
営養不良	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0%
咳嗽	3	8	28	24	21	20	22	40	30	28	224	17%
呼吸困難	1	0	3	1	1	2	1	5	5	0	19	1%
脳神経科疾病	1	2	0	1	3	2	4	2	3	1	19	1%
婦産科疾病	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0%
眼科疾病	0	3	2	4	3	0	1	6	5	3	27	2%
耳鼻科疾病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0%
皮膚科疾病	2	5	9	10	9	14	16	19	9	4	97	7%
科疾病	4	5	15	4	5	6	13	4	9	4	69	5%
外傷外科疾病	17	17	42	34	44	19	41	38	33	18	303	23%
其他	2	2	7	3	9	3	10	11	10	9	66	5%
計	51	69	168	128	141	104	185	201	169	119	1335	100%

診断

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	計	(%)
呼吸道感染	4	9	27	25	26	28	27	45	34	29	254	24%
消化系統感染	0	0	5	4	3	3	2	7	5	0	29	3%
皮膚疾患	2	3	5	10	10	12	21	19	9	5	96	9%
外傷	18	18	49	29	47	20	43	21	34	18	297	28%
慢性疾病	5	12	17	11	20	13	29	21	19	16	163	15%
精神疾病	5	5	12	4	4	5	10	5	7	4	61	6%
其他	4	4	9	17	16	22	37	38	19	11	177	16%
計	38	51	124	100	126	103	169	156	127	83	1077	100%

附表2

南投県衛生局への供与機材リスト

(対南投県衛生局供應品名單)

1．大型テント及び附属品一式（大型帳篷及配件一套）	
・本体、支柱、ペグ（主体、支柱、篷釘）	1件
・蛍光灯（螢光灯）	1件
・テント用ファン（帳篷用風扇）	1件
・キャリア（搬運器）	1件
2．一般用テント（5人用）（一般用帳篷（5人用））	1件
3．折り畳みベッド（折疊床）	10件
4．折り畳みテーブル（折疊桌）	4件
5．折り畳み椅子（折疊椅）	6件
6．発電機（発電機）	2件
7．コードリール（電線巻）	3件
8．浄水器（浄水器）	2件
9．雨合羽（雨衣）	20件
10．ろ水器（濾過器）	4件
11．強力ライト（防水）（強力燈（防水））	2件
12．強力ライト（蛍光灯）（強力燈（（螢光灯））	2件
13．コッヘル（煮鍋）	1件
14．アルミカップ（金属杯）	12件
15．食器セット（食器套件）	4件

供与機材受領書

日本政府緊急醫療支援隊

團長　小井土　雄一　先生

關於接受醫療隊攜帶器材的函

今天我很高興的告訴你小井土團長，我們衛生局接受了日本政府緊急醫療支援隊攜帶的器材(詳見附件)，我們好好的利用這些器材，爲災區的居民，改善他們的生活和衛生狀況。

最後，對參加這次緊急醫療支援活動的日本朋友，我再一次表示衷心的感謝。

1999 年 10 月 3 日
南投縣衛生局
局長　陳獻桐

日醫療隊進中寮 看診內外科

〔記者陳鳳麗／中寮報導〕日本政府派遣的緊急醫療支援隊昨日進駐中寮鄉，爲災民提供內外科醫療服務。而中寮衛生所在醫療任務之外，也監督進行全鄉消毒工作，消毒工作將持續進行一個月。

日本緊急醫療支援隊昨日在中寮鄉公所外搭起特殊的帳篷，加入災區醫療的服務工作。團長水井土雄一帶著四名護士，還有一大批內外科的藥品和醫療設備，他們預定在台灣停留到十月四日，但在中寮的服務時間，視該區需要的程度而定。

這支醫療支援隊曾經在日本阪神大地震擔任醫療服務工作，處理地震後傷病患很有經驗，效率高且井然有序，兩名通譯人員擔任傷病患和醫師的橋梁，讓鄉民印象深刻。

團長水井土雄一表示，阪神大地震發生時間是冬天，台灣「九二一」地震發生在夏天，因此日本當時災民感染肺炎的情況，在台灣應該不太可能發生，目前要小心的是因爲環境不潔而帶來的傳染性疾病。

對於台灣救災的情形，水井土雄一認爲，台灣雖未完全進入狀況，但是行動已經很快，尤其是物資的投入相當快速，而民間比政府付出的力量更大，很讓人敬佩。

9月２５日付自由時報

「日本の医療チームが中寮で内外科を診察」

日本政府が派遣した緊急医療チームが昨日中寮郷に入り、被災民への内科・外科の医療サービスを提供する。～日本の医療チームは中寮郷公所前に特殊テントをたて、医療サービス活動を開始した。小井土団長ほか、４名の看護婦と大量の医薬品、医療設備を携行してきた。～

連戰感謝日本醫療隊支援救災

巡視中寮災情，慰問罹難者家屬。

記者張川／投縣報導

副總統連戰昨日前往南投縣中寮鄉訪視災情，感謝日本政府派遣醫療資源隊支援受傷災民的醫治，他並巡視指揮所，訪問災民收容所及慰問死難者家屬。

連副總統是於昨天上午十一時四十分許到達中寮鄉，發現有日本政府的醫療資源隊支援醫治受傷民衆，當面向他們道謝，接著轉往設在損公所的指揮所巡視救災進行情形及先發放死難者慰問金十萬元及公所的三萬元，工作人員向連副總統報告，其餘款項另行改發支票，以免遺失或發生意外，隨後轉災民收容所向災民表示，每戶災民由縣府發給三千元供他們暫時租屋，發現一名父母都在這次災難中死亡的孩童，鼓勵他要勇敢接受事實努力上進，將來創造美好未來。

最後到停屍處，有七具屍體尚未領回，囑咐相關人員盡速協助家屬處理，並請國軍部隊妥善消毒。

記者張川／投縣報導

副總統連戰昨日在南投縣中寮鄉透露，日本政府資助災民簡易組合式房屋，可供災民暫時解決無家可歸之苦，俟運到後轉發給中寮地區房屋倒塌民衆。

9月25日付青年日報

「連戰副総統が日本医療チームの救援活動に感謝」

連戰副総統が昨日中寮郷を視察した際に、日本政府が派遣した医療チームの救援医療活動に感謝した。～

存活傷患均送出災區

日方醫療設備 都派不上用場

〔記者汪士淳／中寮報導〕日本政府派遣緊急醫療隊赴台灣救災，並在災情慘重的南投縣中寮、鹿港兩鄉設置緊急醫療站。團長小井土醫師昨天說，台灣的醫療資源已經相當先進，他們來此只是站在輔助立場而已。

「你們的醫療體系相當完善，以前我率團到印尼的火山爆發及紐西蘭大海嘯做醫療支援時，我們是主導那邊的醫療工作。」小井土說。他是日本醫科大學外科急救主任，專長為緊急醫療，這回率領了一個連他在內有兩名醫師、四名護士的緊急醫療支援隊來台，經我政府安排到中寮鄉支援，他們迅速撐起一個充氣式帳篷，還帶了包括洗腎在內的醫療設備，不過由於存活的傷患均已送出災區，所以先進的設備都派不上用場。

9月25日付連合報

「負傷者は被災地区から運び出され、日本の医療設備の出番がない」

日本政府は緊急医療チームを台湾に派遣し、被害の大きかった中寮郷と鹿港郷に緊急診療所を開設した。小井土団長の話では、台湾の医療資源はかなり進んでおり、日本のチームは補助的立場に過ぎない、とのこと。～

。心的冷凍民災了暖過，懷關其動行援救的方八面四自來，後之生發震地大一二九
。列行援救入投命待，所公鄉寮中設南這地即日隊救難救間民本日

9月２８日付青年日報
（キャプション）「９・２１大地震」発生後、全国各地から支援活動が寄せられてきた。日本の民間救助チームも中寮郷公所前で、救援活動に加わった。

日本醫療團談「阪神經驗」

災民應振作 自己站起來

（記者陳鳳麗／中寮報導）日本阪神大地震受災戶自組許多團體自助助人，對災後復建工作發揮極大效果，此次來台的日本政府醫療隊，都曾參與阪神大地震救災與災後醫療工作，此次來台不但是實際援助我國災民，也帶來阪神大地震的經驗。

進駐南投縣中寮國小災民收容所的日本政府緊急醫療隊，在中寮一個星期的時間，對民間團體全心全力投入救災的精神與熱忱表示佩服，但觀察災民一週後，他們認爲，災民無法振作起來組成自救團體化爲有效力量，是十分可惜的事。

該隊翻譯人員王珠惠表示，日本阪神大地震後，當地災民馬上自組各種團隊，有秩序、有目標地展開災區各種求援或是向政府交涉等工作，災民內心雖然傷痛，但都能化成一股力量，是其後災區能交出亮麗重建成績單的主因之一。

王珠惠說，在中寮鄉一週，他們看到災民仍然處於哀傷和茫然之中，各自爲政，未形成自救組織是相當可惜的，災民如果無法自己站起來，各種救援團體勢將不可能長期扶持災民。

１０月２日付自由時報

「日本の医療チーム『阪神経験』を語る」

日本で阪神大震災が発生した際には、被災民同士が集まって助け合い、被災後の復興に大きく役立った。今回台湾に来た日本政府の医療チームは、いずれも阪神大地震前後の医療活動の経験を持っているが、被災民の救援活動を行うのみならず、阪神大地震の経験も持ってきてくれた。～

日本醫療團 千里情「援」繫南投

愛的關懷 日夜問診視病猶親 鐵的紀律 即使沒吃沒喝也不與災民爭食

〔記者張南珠南投專訪〕「愛的關懷、鐵的紀律」是日本緊急醫療救援隊的基本要求，這支由日本政府透過日中交流協會派來的醫療團，在團長小井土雄一醫師領軍下，不但堅持對災民要提供良好的醫療照顧，更是禁止團員向慈善團體要補給或與災民爭食物，一切食宿要自己來，小井土雄一強調他們是來支援與付出，不是來接受服務與招待的。

在大熱天裡，小井土雄一脫掉上衣，穿著一件汗衫，為災民看病，他看起來有點疲倦，但是對前來就診的災民流露出自信與關懷，視台灣病人為自己的同胞。

日本緊急醫療團成員包括兩名醫師小井土及近藤、四名看護婦（護士）、兩名調整員（協調員）及台灣籍的翻譯及義工共十餘人，他們進駐中寮國小收容所義診，不忘插上日本國旗。

小井土雄一與近藤均來自日本醫科大學附屬病院高度救命急救術的醫師，王珠惠則負責日文同步翻譯，日本醫療團雖帶有大批藥物，但有些藥物仍不夠，由慈濟醫院支援藥品，在台灣與日本均攻讀藥學系的王珠惠因此提供適時的專業協助，對小井土雄一及近藤在開立處方幾時相當有助益，避免會錯意而影響診斷與給藥。

小井土雄一與近藤日夜為災民看病，除了一般外傷、感冒、腹痛外，尚有一些災民受到驚嚇，產生精神、心理等相關病症，均一一仔細問病情，私藥不敢馬虎。

雖然該醫療團只是個十餘人的小團體，但是日本國旗出現在中寮國小收容所內，仍顯得十分醒目，小井土雄一每天晚上結束義診後，均召集團員開會檢討缺點，他尤其注意紀律，即使遇時沒水、沒食物，也不能主動向其他慈善團體要補給或與災民爭食物或水，他說，緊急救援團隊成員雖有台灣人，但擔上工作證，所有成員的言行均代表日本政府，不能有任何閃失，他要求對災民付出最大的愛心與關懷，但不要忘了自己的身分。

年僅卅五歲的伏見勝利是國際協力事業團沖繩縣業務課成員，每次有些國家發生天災，就是他最忙碌的時候，日本政府一下令動員，他就必須連絡醫師及護士奔赴千里外的災區。

日本醫療救援隊三日將結束支援工作，離開台灣，團員們經十二天朝夕相處，已產生默契與共識，他們的付出在減輕災民的痛苦，醫療與愛心均無國界，小井土雄一等日人希望台灣早日遠離痛苦與悲情，他們不願再因災害因素而重返台灣救援。

〔本報北京二日電〕據中共官方媒體引述大陸「中國紅十字總會」的消息說，台灣九二一地震發生後，該會已組成了幾支具有豐富救援經驗的醫療隊，準備到台灣救死扶傷。

此間「新華社」報導，這些醫療隊已整裝待發，一俟得到台灣方面的同意，將攜帶急救醫療器材和藥品前往台灣災區。

１０月３日付中国時報

「日本の医療チームが、はるばる南投まで心をつなげた」

日本の緊急医療チームに求められるのは「愛の思いやりと鉄の規律」。日本政府が日中交流協会を通じて派遣した医療チームは、小井土雄一団長の指揮の下、被災民に良好な医療を提供し続けるのみならず、団員が慈善団体からものを受け取らず、食住は全て自分達で賄うこととしている。小井土団長は、自分達は援助に来ているのであり、サービスを受けに来ているのではない、と強調した。～

記者黃清賢／中寮報導

九二一大地震傷亡慘重的中寮鄉，除了我國政府、民間社團提供醫療食品救援外，日本政府緊急醫療支援隊也派駐當地，日本團指出，目前災區的用水及環境衛生、孕婦健康仍需特別注意，至於心理復健工作方面，需要專業人員長時間進行。

日本緊急醫療團指出，中寮鄉當地一開始是外傷病患較多，這幾天下雨過後變成感冒求診民眾增加，不過醫療團的醫藥補給不成問題，副團長藤谷浩至說，他們原本就帶很多來備用，倘若真的不夠，也可就近到南投、台中購買，或直接請台北支援。

負責先問診的「醫療調整」中田敬司表示，災民的飲用水衛生應該加強，上廁所後的洗手、沖水也要注意。

擔任廣島文教女子大學講師，但暫時放下工作，趕到台灣救人的中田敬司，還認爲，這段時間無家可歸或不敢進屋的災民都露宿屋外，蚊蟲衛生等消毒工作絕對不可少。

目前，中寮鄉用水是靠消防局從南投自來水廠運來，每天五趟，每趟約十噸，至於消毒工作則由衛生單位或軍方部隊進行，不過，較讓中田敬司擔憂的則是孕婦及胎兒健康，他指出，孕婦原本需要定期產檢，但逢此災變，產檢出現困難，孕婦和胎兒健康問題勢必凸顯。

日付不明中華日報

「９・２１大地震」で大きな被害を受けた南投県中寮郷に、台湾政府や民間団体による救援の他に、日本政府の緊急医療チームが当地に派遣されてきている。日本チームは、目下のところ、被災地の水と環境衛生、妊産婦の健康問題が、特に注意が必要で、精神面のリハビリには専門家が長期間従事することが必要であると指摘した。～

一線希望

圖 來自日本的醫療救難隊，深入鹿谷秀峰村，為幾乎被世間遺忘的秀峰村鄉民們，帶來渾沌中的一線希望。

週刊ＴＶＢＳ（９９年１０月２日号）

「一筋の希望」

日本から来た医療援助チームは、鹿谷郷秀峰村にまで入り込み、ほとんど世間から忘れられていた秀峰村村民に、混沌の中の一筋の希望をもたらした。

【配信番号 5231☆ 6/28 P1 No. 3 1999年 9月22日 6:19■EL99D192】
●社説＝台湾大地震 ひとごとではない
◎朝日新聞 1999年09月22日 朝刊◇ 5面 「M速記事（原文）」

社説

ひとごとではない

台湾大地震

未明の台湾を強い揺れが襲った。

震源から百五十キロほど離れた台北市でも、ビルがつぶれたり傾斜したりして、眠りについていた人びとが揺まった。

震源に近い県では、あちこちから激しい炎が燃えあがって夜空をこがした。

昼夜の救助作業が行われているが、時間の経過とともに犠牲者の数は増え続けている。台湾のラジオ局は「最後最大の地震」と繰り返し報じている。

今回の地震は、阪神大震災をもたらした兵庫県南部地震によく似たメカニズムで起きたという。揺れは阪神大震災よりはるかに大きかったとみられている。

台湾は、地殻を覆う岩板（プレート）がぶつかりあう境界の近くにある。日本と同じように、ユーラシアプレートのへり近くに位置する地震の多発地帯である。

同様の地震が、いつ再び日本で起きても不思議はない。

地震は、台湾中部の、山上の湖として多くの日本人が訪れる観光名所、日月潭付近で起きた。震源が浅かったことが被害を大きくした。

九十万人の人口を抱える台湾第三の都市台中市も震源に近かった。

かつては低い建物が軒を連ねるだけだったが、「台湾の香港」とも呼ばれた高度経済成長とともなって、オフィスビルやホテルが林立した。新旧を体現したその街が激しく揺れ、多くのビルが倒れた。

同市に隣接する台中県や、台湾バナナの産地の南投県からは、それぞれ数百人という犠牲者が伝えられている。

震源に近かった地域とは通信が途絶していて、情報はなお乏しい。阪神大震災のときも、当初、被害の激しかった神戸市内から遠く情報は極めて少なかった。そのことが頭に浮かぶ。

現地はどうなっているのか。少しでも被害が軽いことを願うばかりだ。

昔からまでもなく、地理的に近い日本と台湾のつながりは古く、そして太い。

現在、およそ一万三千四百人の日本人が台湾で暮らしている。進出している日本企業は千四百余社にのぼる。昨年は七十六万を超える日本人旅行者が台湾を訪れた。

台湾からも昨年、八十四万人が来日した。世界の国と地域の中で最多である。

日本政府は、救出活動に携わる国際緊急援助隊の第一陣を派遣した。医療チームも含め、さらに陣容を充実させたい。

現地では多くの人が倒壊した建物の下敷きになっているとみられる。そうした人々の救命率は、地震発生から七十二時間を過ぎると急速に落ち込む。救助は時間との競争になる。

先のトルコ地震の際、迅やかな派遣が功を奏して、がれきの下から一人を救出したことは記憶に新しい。その経験や、ハイテク機材を駆使した救助など、日本の持つノウハウを生かすよう努めてほしい。

緊急援助に関しては、市民生活の安定をはじめ、阪神大震災で日本が得た教訓を生かせるような協力を考えたい。

今年になって、一月のコロンビア、八月のトルコ、九月のギリシャ、そして今回と、大地震が相次いでいる。

また、地球温暖化の影響で、気象災害も大規模化してきたという指摘もある。

災害が発生したとき、各国ばらばらではなく、国際社会が組織的に援助する。そうした態勢はつくれないだろうか。

消えた1階「中に人が…」

救助阻む二重三重のがれき

日本隊、捜索に全力

台湾大地震

【埔里22日共同】「生存者の救助は発生から七十二時間以内が勝負だ。それを過ぎるとぐっと生存率が落ちる。時間との戦いなのではんてはいられない」――。二十二日、台湾中部の埔里入りした日本の捜索救出作業の調整官に立つ警視庁第二機動隊の中里勝之警部さんは、そう言って表情を引き締めた。捜索隊は、警察、消防、海上保安庁の約四十人の編成。

埔里では、四百棟以上の建物が倒壊。コンクリートがれきと化した、人口八万人の町が襲われたが、この地震で百十四人が死亡、四百二十人が負傷し、百十二人がいまだ行方不明のまま。捜索隊が向かった五階建てマンションは、一階部分がぺしゃんこの状態。

「逃げ遅れた人がいるかもしれない」と近所の住民が叫んだ。三〇度近い暑さの中、ヘルメット姿の隊員たちが、周囲をやっきになってがれきを踏み進んだ。ファイバースコープも投入して、生存者の音響に全力を傾ける。「感覚器を研ぎすまして、文字通り二重、三重のがれきに阻まれ、疲れしてます」と中里警部は話した。

別の一角では、四階建てビルが余震の揺れで倒壊した。様子を目撃した近所の男性さんは「建物が右、左、右、左と四回揺れ、ドーンとこう音を立てて崩れたんです」と顔を引きつらせていた。ビルからは未明と夜の一度だけ救出されたが、全身に大けがを負ったがれきにもべっとりと血のりがつき、惨状の凄さをうかがっていた。

夜のビルはこの周囲のあおりで、右側の外壁だけがすっぽりとはがれ落ち、階段や室内の様子が丸見え。その一室の食堂経営の女性さんは「こんな状態ではもうここにはとまれないよ」と顔を曇ってうつむいた。

日本の捜索大隊員では、神戸市内に被害が集中した。しかし、台湾では大きな被害地があちこちに分散し、捜索隊もフルに活動できないでいる。隊員の一人は「疲れも人手も足りず、捜索隊としての実力を発揮しにくい状態だ」ともどかしそうだった。

台湾の現地調査団の幹部は「ここは震源地に近く、被害が想像以上に大きい。二百五十人規模で生存者の発出に当たってはいるが、捜索は容易なことではない」と話していた。

政府が医療チーム派遣

台湾大地震で、日本政府は二十二日、被災者への医療支援に当たるため国際緊急援助隊の医療チームを現地に派遣した。

メンバーは国内で日本医大救急高度救命センターの小井土雄一医師（さいたま市）ら医師二人、聖マリアンナ医科大救急医療部長の看護師多田羅勝義さん（もりやま市）ら四人と、国際協力事業団（JICA）職員ら計十一人。

一方、特定医療法人徳洲会（徳田虎雄理事長）も二十二日、関係病院グループの救急医療チームを現地に派遣することを決めた。阪神大震災でも救援活動をした聖マリアンナ医科大（宮崎市）の先遣隊が二十三日、台北入りする。本格的な救急医療チームは数日後になる見込みで、六人の医師と十人前後の看護師が救援活動に当たる。

テントに余震 帰国者増える

【台中22日白石記】台湾大地震の余震が続く台中市や台中県では二十二日も被災者や高層マンションから避難した住民ら数十万人が、学校などに張ったテントで過ごし、厳しい夜となった。台中市内の公園四カ所に分散した日本人家族ら百人以上も駐在先宅を強いられている。

十四階建てのマンション六棟に暮らす坂秀美さん（36）は家族四人で近くの公園に避難。「マンションには戻ってたニュースが伝わり、公園や空き地で寝る人がどんどん増えている」という。台中市内の住民のほとんどは十階前後のマンション暮らし。市内には約三千棟のビルがあるといわれ、多くの人が余震の恐怖に襲われている。

台中市西部の公園には地元住民に交じって日本人約三十人が一カ所に固まってテントを張った。前日の夜は暑の身のままで家を飛び出し、新聞紙を敷いて寝たが、この日は地元住民の協力でテントを借り入れ、ガスこんろ三台で三十人分のカレーライスをつくり、簡単な夕食を済ませた。

日本人学校の教師、杉本良さん（36）は子ども三人を連れ、二十一日夜から公園に夫人以上も駐在先宅を強いられた。「怪やみでドサドサというものすごい音をたてて揺れる恐怖感は計り知れず、子どもも怖がる。地面に寝ると余震の揺れがじかに伝わってくるが、マンションよりは安全。一週間はテント暮らしを覚悟する」と話していた。

日系の自動車部品会社に勤める大崎由美子さん（32）は本社の指示で、社宅暮が取れ次第、同じ会社に勤める夫を残して子どもと帰国する予定。

「マンションは壁が崩れ、鉄筋が露出する状態。台湾でこんな地震に遭うとは思いもしなかった」と二歳の子どもを抱え、遠方に暮れていた。

公園に避難してテントを張り、簡単な夕食をとる日本人家族ら＝台湾・台中市内で、白石敏撮影

【配信番号　5245☆　9/28　P1 No. 5　　1999年　9月24日 9:23
●台湾大地震　半導体産業にも打撃　停電で操業止まる
◎朝日新聞　1999年09月23日　朝刊◇　3面

台湾大地震

半導体産業にも打撃

停電で操業止まる

【台北22日=鈴木啓、高橋思尚】台湾大地震で、半導体などのハイテク産業が集中する新竹科学工業園区では大手半導体メーカーだけで一日に推定五億台湾ドル（一台湾ドル＝三・四円）に上る損失が出ている。建物や設備には大きな被害は報告されていないが、停電のため工場の操業ができないためだ。同園区の半導体メーカーはほとんどフル生産状態だったといい、生産の遅れは関係産業に大きな影響をうえそうだ。

同園区は台北市から南西へ約八十キロ。台湾版シリコンバレーとも言われ、同園区管理局の劉山一副局長によると、同園区には半導体やコンピューター、通信関連などの二百五十四企業が立地している。このうち半導体の大手メーカーが二十一社に上る。

同管理局のこれまでの調べで、各工場には大きな被害はなかった。ただ、地震発生時にラインに残っていた製品に五億台湾ドルかかるため一日の損失は五億台湾ドルにのぼる。

各工場では、電気が復旧次第、生産を再開する構えだ。同園区では二十四日の復旧を見込んでいるが、「少しでも早く復旧して欲しい」（同管理局員）との声が上がっている。

台湾を直撃した大地震は日米のパソコンメーカーに余波を及ぼしている。すでに半導体価格は地震前と比べて二割以上急騰している。

富士通は主にパソコンに使われる半導体メモリーを台湾で生産ラインが動かないため一日の損失は五億台湾ドルにのぼる。

大手メーカーの電子部品（ウィンボンド・エレクトロニクス社）では、地震発生後数日の損失を数億台湾ドルと見込んでいる。緊急対策チームを結成し、各部門の運搬調整をしている。すでに生産ラインの点検をほぼ終えた。しかし、詳しく点検しながらの再開となる模様だ。

台湾全土に電力を供給しているが、今回の地震で中部にある発電所、青山などの水力発電ダムが損傷を受けたほか、南部と北部を結ぶ送電所が二箇所かかりそうだ。電力の全面的な送電再開は遅れるとの見方を示している。

台湾経済研究院の張浩益企業経済所長によると、台湾経済全体では今年、国内総生産（GDP）の〇・五―一％に当たる五百―千億台湾ドルの損失が予想される。

あった。台湾電力は工業用電力の全面的な送電再開は遅れるとの見方を示している。

台湾経済研究院の張浩益企業経済所長によると、台湾経済全体では今年、国内総生産（GDP）の〇・五―一％に当たる五百―千億台湾ドルの損失が予想される。

半導体価格 2割上がる

供給不足を先取り

（配信実子）DRAMの生産をTSMC社に委託するとともに、基板をエイサーから調達している。決定はウィンボンド・エレクトロニクス社からDRAMを、日立製作所もエイサーから、最大手のNECも数社から部品を調達している。

半導体は現在需給がひっ迫しており、世界の需要量の五％を生産している台湾からの供給が止まれば、今後値上がりする可能性が高い。実際、需給を敏感に反映するスポット価格（六十四ビットDRAM）は、今後の供給不足を見込んで地震前の千六百円前後から約二千円に値上がりしている。

1999年９月23日産経新聞、朝刊

台湾へ医療チーム派遣

日本政府

政府は二十二日、台湾中部で発生した大震災救済支援のため、国際緊急援助隊の医療チーム十一人を派遣した。医療チームは二十二日夕方、羽田空港を出発、同日午後七時四十分ごろ、台北に到着した。

医療チーム十一人は国際協力事業団（JICA）、日本医科大学付属病院の緊急医療の医師、看護婦などで構成されており、十月九日まで滞在する予定。一行は台北到着後、台北から西に約五キロ離れた新北に急行し、既に活動している国際緊急援助隊の援助チームと合流し、救援、医療活動にあたる。

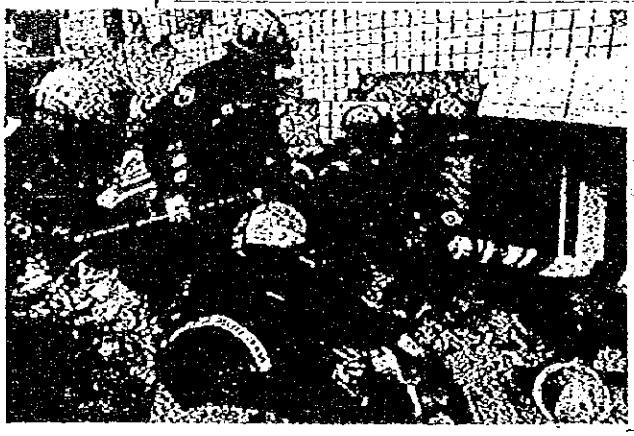
医療チーム 11人を派遣

政府

政府は二十二日、台湾の地震災害者に対する医療支援のため、国際緊急援助隊の医療チーム十一人を派遣した。台中市に近い南投県で救助作業にあたっている日本のレスキューチームと合流する。

懸命の捜索

22日、台湾中部の埔里で生存者の捜索をする日本の国際緊急援助隊＝ロイター



台湾地震ボランティア通訳アンケート調査結果

アンケート項目１．活動参加前

(1) 日本政府の医療チームが通訳ボランティアを募集していることを、どのようにして知りましたか？

・姉の紹介
・大学の先生の紹介
・先輩の紹介（２人回答）
・友人から聞いた
・母親の友人からの情報
・先生からの電話にて
・交流協会から連絡を受けた
・日本の大学の日本語文学科の先生の紹介（２人回答）
・大学の同級生からのインフォメーション
・台湾の大学の吉田妙子先生からの電話にて（２人回答）
・学校の先生の知らせ
・台湾で日本語補習班のクラスメートから勧められた
・娘の紹介
・前の日本語のクラスメートからの紹介

(2) 通訳ボランティアの活動に関して、交流協会または医療チームからの説明で、不足していた内容・情報はありましたか？

・説明がちょっと足りなかったかもしれない。
・事前、説明がやや足りなくて充分な事前準備ができませんでした。
・特になし（５人回答）
・第１日目が台中への移動だけだとは知らなかった。
・当日の晩、はじめて知った。
・緊急事態なので、事情がよくわからないことも理解できるが、３日と言われて、正味３日かなと思いました。
・医療チームからの説明は全然聞いてなかった。交流協会からの説明もちょっとしか分からなかった。
・来る前は「震災地区通訳が必要」とだけ聞いていたので、何をするのか知らず当日の夜に分かったが、概要は事前に分かっていたほうが良かった。
・集合場所と時間をよく変更した。事前に確かめた方がよいと思う。
・事前に住む所、着る服、何時にどこで集まるという詳しい内容を説明していただきました。初日、翌日のスケジュールを聞いたが、ちょっと分かりくかったと思う。
・医療チームからの説明で活動の内容・情報がわかりました。

(3) 通訳ボランティアの活動に関して、交流協会または医療チームからの説明で、実際と食い違っていた内容はありましたか？

・実際は想像していたものより悲惨な情況ではなかった。
・特にありません（7人回答）
・最初からあまり情報をもらっていなかったので、実際との情況も比較できません。（2人回答）
・事前の情況をよく知らなかった。
・宿泊所は意外によかった。
・実際と食い違っている内容はあったけれども、プラスの面ばかりでした。(例えば、ホテル宿泊になったことなど)

(4) 通訳ボランティア同士の引き継ぎに関して、良かった点、改善すべき点があれば挙げてください。

・みんな丁寧に説明してくれて、とっても役に立ちました。
・先輩や前任者が親切かつ丁寧な説明により、今度の活動を順調に進められた。（2人回答）
・特になし（2人回答）
・色々な意味で悪くはないと思いますが、二日間でやっと様子が分かり、慣れてきたような気がしだしたのに、もう離れなければならないというのは、かなりの無駄でもあるし、残念にも思います。
・三日間だけ、ちょっと短かったです。特に最初の一日目はなにもできなくてただ、待ち合わせだけでちょっと勿体ないと思う。
・みんなはとても熱心なので、最初はちょっと大変かもしれないが、仕事をうまく進めていると思います。
・今回の引き継ぎ方はよいと思うが、一日目の時間が無駄であり、楽ではあるが、心の準備もできているので、一日目の朝、出発して昼には仕事をしたかった。
・仕事の引き継ぎは前の会議で業務内容を理解し、現場では状況を把握しているものの、活動期間は短いし、状況がわかると離れなければならない。
・特に第1日目は多少時間の無駄がある。（3人回答）
・改めた点があれば、すぐ知らせてくださったので、改善すべき点がない。
・教えてもらった事は十分である。
・現場に行く前、ボランティアの先輩たちと一緒に夕食ができて、いろんな現場の問題を聞いて教えていただいたので、安心できた。

(5) 事前の情報提供以外に現地でのボランティア受け入れ体制に関して、改善すべき点ああれば挙げてください。

・特になし（5人回答）
・現地は徐々に落ち着いてきている。何をしていいか、分からず戸惑っているボランティア団体もあるので、一括して仕事の振り分けをしないと、せっか

く来ても役に立たない。
・一日目の時間がもったいなかった。
・ボランティアにつき、日本語がうまいけど、台湾語もできることが基本条件だと思う。
・良かった点といえば、互いに情報を交換して通訳する同士から教わったことも多い。改善すべき点はないと思う。
・現場で働く時間は二日間だけで、そのうちの一日目は見習うだけで、本当にスムーズに仕事ができるのが残り一日しかないので、チームにとっては人力や車代などはちょっと浪費で、三日間で一つのサイクルにする方がよいと思う。

アンケート項目２、現場での活動

(1) 受付での通訳（良かった点、うまくいかなかった点）
・台湾語の説明があまりうまくいかなかった。（２人回答）
・特になし（２人回答）
・台湾語の使用が良かった。
・台湾語がうまく使えず苦労した。
・チームワークはそれほどよくなかったような気がする。
・台湾語で話ができて患者の状況と気持ちが理解できた。
・専門用語の表現がわからなかった。
・医学用語と台湾語が大変重要で、特に診察時、台湾語ができないと大変苦労する。自分も台湾語は得意でないので、全く分からなかったこともある。
・台湾語は必要。
・受付で待つ人を座って待たせるのは理にかなっているが、皆、慣れない感じで、座ってられないようだった。
・書き込みのフォームは英文で書いてあったので、よく読めなかった。日本語で書けないか。
・台湾語を使っているだけに親しみ易くなり、隔たりなどは感じなかった。
・災難者にとって、わざわざ遠く日本から両言語できる通訳が来て、行動も早く、民間関係も良かった。次に来た人は年配の方が多く、カルテを探すのに時間がかかった。
・患者の気持ちはわかるけど、どうやって自分の関心や同情を彼等に表わせばよいかが難しかった。しかし、住民たちは私たちに情熱で私よりもっと優しくしてくれて、一人一人の素朴な顔を見て心が痛く成りました。

(2) 診察の時の通訳（良かった点、うまくいかなかった点）
・台湾語の説明がうまくいかなかった。（２人回答）
・台湾語の聞き取り、会話（特に漢方医療用語）に苦労した。
・自分が傷口を見た時、驚いて声を出してしまった。
・医師と患者両方が使う形容詞をどう適切に訳すればよいか迷った。
・医師も看護婦も患者に大変親切で、患者の家庭や生活にも関心を持っている。

・問診して医者が見るのは非常に細やかな対応で、台湾の医師のように適当な感じではない。
・身の不具合症状の言い方がよく分からない。
・同じ言葉を何度も繰り返して使うことにより、困難はなかった。
・自分自信、勉強不足であると感じた。
・ガーゼを交換する時、医者と看護婦はミネラルウォーターで傷口を消毒したことがよい印象として残った。
・精神的にまいって扱いにくい患者はいなかった。老人患者が古い台湾語で話すので時々通訳できなかった。
・患者の話しでは、心理的症状か生理的症状か、素人の私には判断できなくて、また、患者たちもはっきり症状を話さないのでうまくいかなかった時もある。

(3) 投薬時の通訳（良かった点、うまくいかなかった点）
・台湾語の説明がうまくできなかった。（２人回答）
・特になし（４人回答）
・薬の飲み方の説明が大変詳しい。
・薬の名前は外来語で話さないで欲しかった。
・薬のビニール袋の表にはっきり飲み方を書いてはあるが、看護婦さんは丁寧に飲み方を説明してくれた。
・私にとっては一番簡単な仕事だった。

(4) 通訳活動全般を通じて（感動した事、困った事、その他）
（感動した事）
・患者さん一人一人が感謝を言葉を述べてくれた。（２人回答）
・子供たちが明るく、思っていたより皆が元気だったこと。
・避難所に小さな図書館があり、そこで絵本を読んだり、オルガンを弾いている子供たちに感動した。
・患者が治療を受けた時に安心した表情をみせるのが嬉しかった。
・受災者は苦しいはずなのに、明るく「大変ね。」などと声をかけてくれる健気な態度に心を打たれた。
・お互い知らない同士であったが、仕事に入ると助け合っているのに感動した。（３人回答）
・日本の医療チームが皆一生懸命である姿に感動した。
・感謝の歌を歌ってくれた。
・こんなに短い間に全部の人の病気を治すのは無理だと分かっているが、大切なのは辛い日々を送っている患者達に私達の関心や好意が伝わることだ。
・違う国の人々が同じ目的に向い一つのチームになって活動したこと。
（困った事）
・台湾語がうまく日本語に訳せなかった。（２人回答）
・専門用語の問題（２人回答）

（その他感じた事）
・他のボランティアの方々、特に料理担当のおばさんたちは大変だと思う。
・被災者だけが病気やけがをするだけでなく、ボランティアや軍人も活動中に病気になったり、けがをするので、スタッフのケアも必要だと感じた。

(5) 医療チームとの連携
（うまくいったと感じた点）
・お互いの時間を埋めあ合ったので仕事の効率がよかった。（２人回答）
・日本の医療チームに対しては「協力してくれて本当にありがとう」という感謝の言葉だけだ。
・毎日、当日の活動について検討会を行なって、翌日の仕事内容に気を配り非常に効率的なやり方であった。（２人回答）
・皆がちゃんと自分の責任を果たした。
・仕事について詳細に説明を受けたので仕事が良く運んだ。
（うまくいかなかったと感じた点）
・午後は暑すぎるせいで皆疲れているようだった。
・病状の説明に戸惑ったり、患者の状況をうまく伝えられなかった時。
・受付で外傷患者がいっぱいになっていても再診患者を診察していることに気付かないことがあった。前に別の病院で見てもらっても、日本の医者が評判が良いと聞いて、又来る人も多く、医療資源を浪費してはいないか。特になし（３人回答）
・医療の専門用語（薬品や病気の名前など）の辞書を１冊用意してくれたら、役に立ったと思う。

(6) 今回の地震に対する印象は、現場に来る前と、来た後で、どのように変わりましたか？
・予想とおり。多分時間が経ってきたので、もうそれほどの被害は人々から見られなかった。
・だいたい予想どおりだったが、被害者の心理的ショックは予想以上でした。
・思っていたより、きれいで安心した。
・住民のことは本当に大変だと分かった。再建するのは時間がかかると思う。
・大きな変化はないが、地震の真相を深く印象づけられた。
・何日も経ったということもあり、想像してたより皆が落ち着いていたので安心した。これから何をすべきか分かるようになった。
・来る前は現地の状況がよく分からなかったが、来てみて、被災地の住民が苦労して建てた家が一夜で壊れてしまったので辛く感じた。
・けがの状況は思ったほど、ひどくなかった。おそらく、大病院に送られたのだろう。
・被害の状態を自分の目の前にした時、とても実感がわいた。
・来る前は人々は冷たい感じがしたが、来てみて、人情が暖かいと感じた。

・どんどん穏やかになっていった。
・震災に対する被害状況はテレビ放送では実感がなかったが、来てみると生々しい被害状況が目の前にあらわれ、驚いた。（３人回答）
・自然の力を油断したらいけないと思った。

(7) 今回の通訳ボランティアに参加して良かったと感じたこと。
・人々の暖かい心をみることができた。
・年配の方との会話が楽しめるようになった。
・傷を目にしても怖くなかった。
・被災地の役に立てて、本当によかった。（２人回答）
・皆初めてだったが、仕事を協力し合えて楽しかった。日本の友人が協力してくれて感謝すると同時に効率的な仕事の仕方がわかって良かった。
・いい勉強になった。
・はじめての救援ボランティアで、胸を打たれることも多かった。これからもっと色々な面で人を助けることができれば良いと思う。
・被災者の生活を理解し、不十分でも出来ることをしてあげたのはよかった。
・今回の活動を通して、日本人が「円満」に物事を進め、色々な角度から物事を考え、毎日ミーティングを開き、業務を引き継いでいることを知った。
・以前に台湾人の医師とボランティア活動したことがあるが、自分の領域だけの仕事をしてまとまりがなかった。今回は何をしているかが、会議を通じて知ることができた。
・日本人の優しさを直接台湾人に伝えた事が良かった。国民外交の一番よい方法だと思う。
・医療チームの皆様や通訳仲間、現地の人達と交流できる事は良かった。
・この先、自分の人生観が変わると思う。

(8) その他、率直な意見
・本当にお疲れ様でした。一台湾人として心から感謝致します。（２人回答）
・日本語通訳・翻訳のネットワークができれば良いと思います。
・事前の説明では台湾語の必要性をあまり協調しなかった。
・他の団体が同じ場所で医療活動をしていたのは「資源の重複」と感じた。
・自分が今度の大地震に対して、何かできたことは非常に嬉しいこと。
・もう少し早くスケジュールを渡してくれたら、イメージがもっと深くなり、通訳にも役に立ったと思う。
・皆さんと一緒に仕事ができるのは楽しいが、震災後の悲惨な現状には再び遭いたくない。
・出発する前に台北にいる友達や同僚から医療支援隊の皆さんに感謝の意を伝えるよう頼まれました。

以　上

JICA